

国語の力その3

2024. 7. 29

「論理」というと、むずかしいイメージがあるかもしれない。しかし、「論理的思考」とは、決してむずかしく考えることではない。逆に、むずかしい事柄を単純化することである。そうでなければ、誰にでもできるものとはならない。誰にでもできるはずなのに、多くの子どもたちが、これまでは、試してこなかった。試すことをさせてもらえなかった。それが、論理的思考である。

国語には、様々な誤解のようなものがある。国語に対する間違っただイメージがあると、論理的思考に基づく国語の話が入っていかなくなる危険性がある。そこで、まずは、国語に対する誤ったイメージを一新したい。

物語や小説の影響なのか、国語は味わう教科だと思われているふしがある。そうになると、テストには馴染まない。文章の味わい方や感じ方に決まった答えなどないというわけである。確かに、文章の味わい方や感じ方に答えはないだろう。自由である。むしろ、自由でなければならない。

国語とは、味わい方を学ぶ教科なのだろうか。そんなことはない。国語とは、論理的な読み方・書き方を学ぶ教科である。味わい方はテストをすることはできない。だが、論理力であれば、テストをすることができる。もし、保護者の皆さんが、我が子の国語力を伸ばしたいという願いを捨てるのであれば、味わう国語を受け入れてもいいかもしれない。しかし、願いを叶えようとするならば、自分が受けてきた教育から離れ、考えを新たにすることが必要である。

皆さんが、子どもの頃に受けてきた国語の授業は、どのようなものだったのだろうか。このような授業はなかつただろうか。小学校ならば、文章を紙芝居や劇にする。感想文を書き、発表し合う。中学校であれば、先生が淡々と、あるいは熱心に文章の解説をする。それを黒板に書く。生徒は、それを淡々と書き写す。

これといった勉強方法がない。何を学んでいるのかがわからない。曖昧でとらえどころがない。やってもやらなくてもさほど変わらない。それが国語である。算数・数学のように、公式や解法があるわけではない。こんなふうに思ってきたのではなからうか。

しかし、国語そのものは、決して曖昧ではない。曖昧なのは、あくまでも国語の授業である。これまでの多くの授業が曖昧だったために、国語そのものまでもが曖昧であると思われてきた。先生方は、国語の授業で悩み、苦しみながら、子どもたちに力をつけさせたいと努力を重ねてきた。では、子どもたちが変わってきたかということ、そうとは言えないのが現実である。授業が変わっていないのである。実は、どう変えたらいいのかわからないという先生方が多いのではなからうか。